



No.91 2008. 7
 (株)よかネット

NETWORK

住みよい地域づくりへの思い、引き継ぐ人が生まれるまち
 ～和白東自治協議会の取り組み～ 2

大人の学び場「糸島まるごと農学校」 5

地域住民や民間との連携で見守る体制が必要な屋外広告物
 ～福岡県のケースで考える～ 6

第1回観光勉強会を開催しました 7

第16回よかネットパーティー報告 9

皆様から寄せられた
 「よかネット」へのご意見、近況などの紹介 10

見・聞・食

農村集落が経営する直売所 有限会社「福ふくの里」
 ～農家の収入と地域の雇用を産んだ～ 11

福岡県内に新たにオープンした道の駅2ヶ所に行ってみた 12

私の四国遍路“おもしろい”と“うんざり”の旅日記 14

さかなの流通・販売についての勉強会を開催しました
 ～第1回ものの売り方勉強会の報告～ 18

近況

ファシリテーションに参加しました 20

新人紹介 20

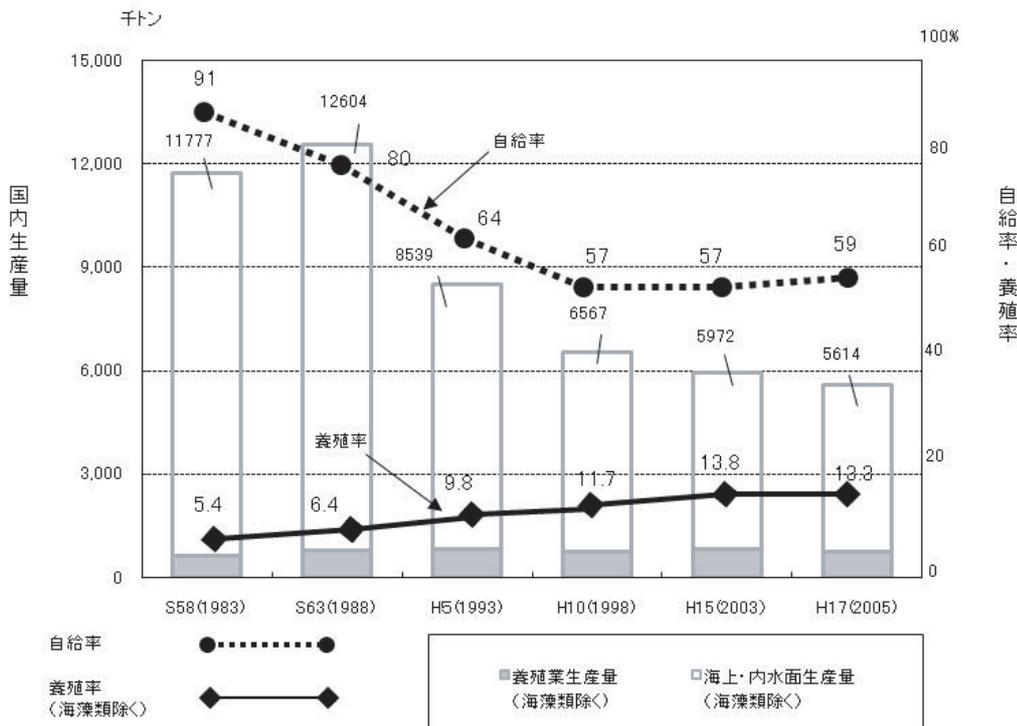
書評

表紙解説 21

『ボローニャ紀行』 井上ひさし著 22

●今後、ますます国内の魚介類生産量は、養殖の割合が高まるのではないか？

魚や貝類の生産量は、海で捕れる漁獲量低下、輸入量の増大などに伴い、年々減少傾向にあります。その中であって国内生産量(海藻類除く)に占める養殖生産量は増加傾向にあります。年々、国内の魚消費量は低下傾向にあります。今後、世界的な魚食拡大にともなう輸入量の低下、漁業就業者の減少などを考えると、海から捕獲する量には限界があり、国内生産量のなかで養殖の比重はますます高まっていくものと推察されます。(関連記事 18、21頁)



資料: 漁業・養殖業生産
 統計年報
 食料需給年報
 漁業動態統計年報

住みよい地域づくりへの思い、引き継ぐ人が生まれるまち

～和白東自治協議会の取り組み～

山田 龍雄

昨年の8月に鹿児島県鹿屋市柳谷集落を視察し、柳谷集落の地域づくりの物語を報告させていただいた（よかネット88号掲載）。

最近こそ、“地域自治”といったことが言われ、自治体では行政主導のもとに地域自治を見直す動きがみられる。しかし、柳谷をはじめ、地域独自で主体的に地域活動に熱心に取り組んでいるケースが多々あるものと思う。このような地域のケースを通して、自主的に地域自治に取り組んできた活動の原動力は何なのか、また、何が原因で活動が継続できているのかなどもっと基本的なことを知りたいと思っていた矢先、当社の社員から「和白東自治協議会」の活動が活発であるとの情報を得た。

そこで、5月末に自治協議会の拠点となっている「和白東公民館」に直接電話し、ヒアリングのお願いをすると、公民館長さんが「今は、夏まつりの準備で忙しいので、日程を調整しないとイケない。夏まつりのことを聞きたかったら、準備会がある日に来たらいいですよ。他に聞きたいことがあれば、要点をまとめてFAXして下さい」と言われた。今は、“夏まつり”の準備が忙しく、ひょっとしたら、こちらの勝手な取材に応じていただけないかと不安を抱きながら、言われたとおりに聞きたい内容をまとめて、FAXすると、翌日、取材指定の日時を定めていただき、6月の上旬に取材を行うことができた。

公民館の生涯学習が発展した地域づくり活動

和白東小学校区は、福岡市の最東部に位置しており、豊かな田園地帯であったのが、昭和30年代後半からの宅地開発によって人口が急増した地域である。本小学校区の自治会は、昭和51年4月に和白小学校より分離して和白東小学校となったのを契機に、昭和52年に和白東自治連合会としてスタートしたのが始まりである。和白東小学校区の人口、世帯数の動向をみると、昭和38年ごろの人口は1,158人、世帯数は657世帯（和白東のあゆみ：平成12年3月発行）であったのが、今では、人口12,368人、世帯数4,976世帯（平成16年9月30日現在）、65歳以上の高齢化率も約20%となっている。主に昔からの一戸建てに住む高齢者と、



和白東小学校区の位置

最近の集合住宅に居住する若い世帯とが混住する地域となっている。約50年の間に人口は約11倍、世帯数は約8倍となっており、人口の拡大とともに地域自治の活動も苦勞しながら取り組んできたのではないと思われる。

福岡市では平成16年4月から公民館をコミュニティづくりの核として位置づけ、小学校区毎に地域の事柄を協議する「自治協議会」をつくってもらい、補助金を一本化して渡し、地域の実情に応じた独自の取り組みを進めていくような仕組みとしている。和白東小学校区も平成16年に自治協議会として運営している。現在、自治協議会のもとに町内会をはじめ、40団体が活動している。当小学校区では、これまでの自治会の既成の団体以外に、昭和60年代はじめに始まった公民館の生涯学習活動から発展した団体も4～5団体ある。

取材当日、予定の時間に公民館に到着すると、主な団体の代表者の方も同席していただいていた。3時間近い時間を取っていただき、30数年の活動を一端をお聞きすることができた。

今回、活発な地域活動を展開している主な団体の設立のきっかけと取組み状況、及び地域づくりの核となっている「夏まつり」のことを報告させていただく。

手助けする、してもらうの上下関係がないことを目指すボランティア団体「おあしす」

昭和63年頃、この小学校区には交番はなく、日常的な相談事は公民館に持ち込まれていた。この時代、既に高齢者世帯も増えていたのであろう、

表 自治協議会内の組織

- ・和白東1丁目～5丁目までの町内会
(1丁目は1区～5区で各々町内会)
- ・高美台1丁目～4丁目までの町内会
(1丁目と2丁目は1区～3区まで、3丁目と4丁目は1区～2区まで各々町内会)
- ・自主安全協力会 ・健康づくり推進協議会
- ・防犯組合 ・社会福祉協議会 ・衛生連合会
- ・ボランティア「おあしす」
- ・共同募金・日赤募金代表
- ・交通安全推進協議会 ・ごみ減量推進協議会
- ・献血推進協力会 ・体育協会
- ・青少年育成連合会 ・子供会育成連合会
- ・子育て支援連絡協議会
- ・Msの会・男女共同参画推進会
- ・人権尊重推進協議会 ・民生・児童委員会
- ・食生活改善推進協議会 ・「花壇花かご」
- ・レインボークラブ連合会 ・自治協議会婦人部
- ・東福岡交通安全和白東部

相談の中には「旦那さんが入院していて、一緒に食事してもらえない人がいないか、おしゃべりできる人がいないか」などがあった。このような地域の日常的な悩み事にどう答えるべきかを考えるため、ボランティア講座を開設し、ボランティアの勉強をしてきたが、実際に行動する組織を立ち上げるのは容易ではなく、5年を要したようだ。「おあしす」結成への動機付けとなった出来事が平成5年に起きた。それは「ボランティア講座」の体験講座で講師を務められた小学校区内の男性の人が、「認知症の妻を自宅で見ているのですが、一番困ったこと、情けなかったことは、選挙に投票に行けなかったこと」という発言であった。ボランティア講座を受けていた受講生の皆さんが、「自分たちの住む町は、困っている人がいるのに何も手助けできないなんて冷たい町であるのか」と思ったことである。これをきっかけに公民館活動の女性セミナーなどの参加者に声をかけ、31名で、翌年の平成6年6月に会を結成された。活動の範囲を小学校区内と定めており、サービスの内容は介護保険で対象となっていない清掃や炊事などの家事や送迎、または産後の手伝いなど困っている人へのちょっとした手助けである。現在、活動している人は、設立当時と同様に31名である。

当初、活動資金は参加した人が1,000円を出資し、3万1千円からのスタートであったが、その後、助成金を受け、活動も軌道にのったとのこと。

表 サービスの内容

- ・掃除、洗濯、話し相手、子守
- ・産後の手伝い、通院などの送迎
- ・寝たきりの方の理容(美容師)
- ・その他が必要と認めるもの)

この会では、手助けする人、手助けされる人といった上下関係をつくらぬよう、1回(2時間)、200円の有償ボランティアで実施している。この200円は、会の運営費にあてられる。

現在は、高齢者や障がい者などからの送迎ボランティアや清掃の依頼が多く、送迎に要する交通費は、車で送り迎えしてもバス代を基本に依頼者からいただいている。

私が「有償ボランティアでも1回(2時間)、200円とは少し安いですね」と言うと、代表の池浦さんは「月10回ぐらいボランティアを頼む人からすると、月2,000円を年金から出すのは大変なのよ。同じような有償ボランティアで1回600円にしていたグループは、続いていない。今、考えると、200円にできてよかった」と言っておられた。

また、現在のグループの平均年齢が約70歳であり、80歳代のメンバーもいるとのこと。課題としては、高齢者からの依頼者で、本人より年上の方が手助けに来られると気兼ねするらしく、できるだけ50代、60代の方の参加を期待している。

10年前、当時、我が国でも最も高齢化率(当時約40%)が高かった山口県東和町に取材にいったことがある。ここでは弁当宅配では、各集落の拠点までは社会福祉協議会が配達し、集落の各戸への配達には地域の人へバトンタッチするというシステムであったが、ある集落では80歳を過ぎた人が各戸へ配達していた。また、宅配弁当を作っていた3人中2人が75歳以上の高齢者であったことを思い出した。これからの高齢化を考えると、元気な高齢者が、身体が不自由になった高齢者の面倒を見るのが普通になると思うので、これからはもっと元気な高齢者に期待した方がよいのかも知れないと思う。

地域ぐるみの子育てネットワークを築いている
「子育て支援連絡協議会」

平成12年～14年の3年間、衛生連合会(昭和57年4月の婦人部に設置、各種、がん検診など小学校区の保健、健康増進活動の会)のモデル事業と

して、子育て支援の活動を行った。この3年間の活動の中で ラッコサロン（0～3歳児と保護者、妊婦の方が公民館や幼稚園に集まり、子育ての情報交換をする場）、公園へ行きましょうDAY（毎週一度は公園に行く日を決め、自由に公園で交流する）、声かけ運動の3つの柱を設けて活動してきた。3年間のモデル事業ではあったが、活動に参加された人たちは、ここで活動を止めてしまうのはもったいないとのことで、平成15年に「子育て支援連絡協議会」として新たな会を設立した。この会は、自治協議会はもちろんのこと、子育てに関係する社会福祉協議会、高美台保育園、博多南幼稚園、民生委員、和白文庫など各種団体とのネットワーク組織である。2ヶ月に1回の頻度で集まり、お互いの活動や小学校区内の子育ての問題などの情報交換、あるいは各団体の情報発信をしている。

代表の古閑さんは「この会の良さは、子育てに関係する多くの団体が加盟し、お互いが情報交換し、必要に応じて団体間での協力や助け合いができることである。単独で活動しているグループだと、地域内でのつながりが弱く、継続しないのではないか」というようなことを言われていた。

多くの市町村で「子育てサロン」があると聞く。これらのグループが、乳幼児から小中学生までの子供の成長を見守る活動へ発展、広がっていくためには、やはり和白東校区の取り組みのようなネットワーク体制をつくり、日常的な情報交換ができるかどうか大きなポイントだと感じた。

この会では、3年前から上和白中央公園を利用して、子供たちの冒険心を育むため「1日プレイパーク」を企画している。この企画には小学校区内の親父の会、PTA、九州産業大学や福岡工業大学の学生さんなどが手伝い、運営にあたっている。このプレイパークには300人近い子供たち（幼児から中学生まで利用）が参加するそうだ。このプレイパークの良さは、幼児から中学生までの子供たちが参加するので子供たちの夕テの関係ができ、お兄ちゃんが子供たちの面倒をみるようなサイクルが生まれてくるらしい。

小学校区レベルの男女共同参画推進の活動をしている Ms（みず）の会

この会は、平成4年度の和白東小学校区における男女共同参画の準備委員会として、当時の町内会をはじめ、各団体の女性代表者と一般公募の人たちとの、各団体の運営の悩みや日常的問題を

表 Msの会の主な活動

<ul style="list-style-type: none"> ・各種団体交流会 ・映画会 ・Msの会だよりの発行 ・集い～会員の親睦と交流 ・リサイクル活動（6月、9月、12月、3月） ・男と女の社会学講座 ・ふれあいサロン（毎月1回） ・その他公民館活動、各種団体への協力、参加

話し合うことから始まった。

当初、準備会を立ち上げるときに婦人部に集まってもらおうように言ったところ、「何で女性だけ集まって話しあわなければならないのか」といった反発もあったが、会の趣旨を理解していただき、メンバーを集めるのに苦労されたらしい。このような準備会を経て平成5年に会を設立された。

会の目的は、男女共同参画の推進を図ることと会員相互の親睦を深めることにあり、公民館活動・自治会活動に積極的に参加している。

この会では、映画部、広報部、集い部、研修部の4つの部会で運営しており、特に映画部では創立以来、毎年、自主上映をしており、今年で14回目を迎える。「映画のMsの会」とも言われており、上映会には約300人が見に来るそうである。また、福岡工業大学（NPO法人：地域交流まちづくり実行委員会）と連携して「エコステーション（機器の回収や空き缶の処理などの管理運営、エコ環境の啓発活動の拠点施設）」の管理、運営にもあたっている。この会は、単に男女共同参画を唱えるだけの団体ではなく、地域に必要なことを女性の視点で発展、活動へつなげていく組織になっているのではないだろうかと思う。

各団体をつなげ、地域づくりの啓発活動となっている“夏まつり”

この小学校区を語るのに、“夏まつり”は欠かせないらしい。「山笠があるから博多たい」と同じように「夏まつりがあるから和白東たい」と言ったことになるのかも知れない。夏まつりの話になると、集まっていた方に開催される夏まつりを見学せず、この記事を書くのは恐縮な感じもするが、予告編として読んでいただければよいと思う。

夏まつりを始めるきっかけは、敬老会であった。平成4～5年頃、高齢化に伴い、敬老会の予算がふくらんできたこともあって、より3世代が交流

できる効果的な事業ができないかとのことから始まった。平成6年にはじまり、今年で13回目を迎える。これまでの最高の参加人数は約7,000人弱、昨年も5,000人くらいが来たのではないかとこのことで、小学校区住民の半分近くが、この祭りに来ているというからすごい。祭りに係わった人たちは、祭りが終わったあとは決まって「もう来年はしないぞ」と言うらしいが、やはり夏が来ると準備をはじめののだそうだ。

話を聞いた中で出された、これまでの祭りの魅力の一端を、以下に紹介したい。

- ・町内会や各種団体、サークルが17~18件出店する。当然、売上げが各団体、サークルの運営資金となるので、各出店とも熱が入るらしい。
- ・手づくり花火がすばらしいらしい。当初は、プロの職人さんに花火をあげてもらったのであるが、周りが住宅地であったことから騒音や後くずが落ちてくるなどの苦情があったこと、また、予算が限られていることから、自分たちで花火をあげようということになった。手づくり花火とは基本的に市販されているおもちゃの花火を使用する。昨年は、おもちゃの花火を継ぎ合わせて、ドラゴンの仕掛け花火を作り、最後には口から火を吐いたような仕掛けであったとのこと。手づくり花火は、毎年、夏まつりの目玉となっているらしい。
- ・家庭で使用しなくなった衣類や陶器類などのバザーも開催し、毎年あがる20数万円の売上げは、この夏まつりの資金源となっている。
- ・商店街から商品を寄付して頂き、クジ引き大会もしている。
- ・障がい者のふれあいテント、乳幼児の授乳、おむつ換えに利用できるテントなど障がいのある人をはじめ誰もが参加しやすいソフトな仕組みを作っている。
- ・小学校区の子供たちが考えた交通安全の標語を「提灯」に書き入れたり、ゴミゼロ運動ということで自分たちで出したゴミは家庭に持って帰ってもらおうような取り組みをしており、夏まつりを通して環境や人権活動の啓発を同時に行っている。
- ・まつりの司会は、地元の中学生が担当し、自分たちのアイデアも盛り込んだ進行もしている。このような話を聞くと、まさに地域ぐるみ、地域総出の祭りといった感じである。この夏まつりは準備段階や実行に至るまで、地域のいろん

な人が係わるからこそ、この祭りを通して、地域の各種団体のつながり、子供からお年寄りまでの世代間のつながり、祭りの実行のために裏方で働いた人と人とのつながりなど、多くの絆が生まれ、また強くなっていっているのではないかと思った。この夏まつりが「和白東小学校区」の日常的な活動の原動力にひとつになっているのは間違いない。

取材に参加していただいた方々から、今年是非、夏祭りを見に来て下さいとのお誘いを受けた。

ここまで和白東小学校区の夏まつりの魅力を聞かされると、見ないわけにはいかない。今年の開催日は、8月2日(土曜)となっているので、是非見学し、改めてご報告したい。

(やまだ たつお)

大人の学び場

「糸島まるごと農学校」

吉田 佳祐

二丈町で行っている糸島まるごと農学校にお手伝いとして参加した(糸島まるごと農学校の詳細は、よかネットNo.89参照)。今回のプログラムは、昨年11月に実習で植えたじゃがいもの収穫と、収穫した野菜を使ったカレーづくりである。参加人数は30人程度であった。

毎日食べたい地元食材カレー

収穫前、講師をしていただいている農家の山崎さんから、じゃがいもが出来なかった理由について説明が行われた。受講者は不出来の原因について互いに意見を交わし、作業の合間に山崎さんに質問するなど、野菜作りに対する関心の高さが伺えた。

収穫したじゃがいもを用いたカレーは、農作業に汗を流した後の食事、自分で収穫した野菜ということもあり、格別だった。食材には、以前まるごと農学校の実習で収穫した玉葱、福ふくの里で購入した、いきさん牧場の豚肉等、二丈産の食材だけを用いた。カレーに入っている全ての食材が、近くで育てられた新鮮なものということに、私は安心感を覚えた。そして、普段外国で作られた食材ばかりを食べているかに気づき、食に対する意識の低さを痛感した。このカレーの様に地元の食材だけの料理を毎日食べたいと思った。

ここでしか聞けない農家の話

カレーを食べ終え、受講者は雑談に花を咲か

せ、にぎやかに過ごしていた。予定には無かったが、ここで、再び山崎さんに来てもらい、野菜作りに関する意見交換を行った。そのいくつかを紹介する。

「玉葱はどんな苗を選べばよいのですか」、
「見た目以太い苗を選んでしまう人が多いけど、細い苗の方が活着（根付いて成長を始める事）がよくて、大きくなるんよ」、「玉葱の苗を植える時期はいつ頃ですか」「玉葱は9月20日頃やね。最近温暖化のせいか、気温が上昇しとうけん、本に書いてある時期より5日ずらして植えた方がいいよ」等、受講者からの様々な質問と、農家ならではの返答のやりとりがあった。

意見交換が始まると、部屋の中は次第に静かになり、受講者は、山崎さんの声に耳を傾けていった。受講者は足をくずし、くつろいでいるものの、考えている様子でうなずいていた。メモをとる参加者の姿も目立った。ここは受講者が積極的に農家とコミュニケーション行う、知的な場であると感じた。

私は、今回1回だけの参加であった。受講者と農家の意見交換のやりとりを見て、このような環境で植え付けから、収穫までのこれまでのプログラムを受講し、農家の方の教える技術を学んできた受講者達をうらやましく思った。

(よしだ けいすけ)

地域住民や民間との連携で見守る
体制が必要な屋外広告物
～福岡県のケースで考える～

山田 龍雄

昨年から大分県由布市（平成17年10月に旧湯布院町、庄内町、挾間町が合併）の景観マスタープラン策定のお手伝いをしている。

地元で自主的に街並み景観に取り組んできた旧湯布院地域の湯の坪街道周辺地区では、建物の形態意匠や色彩などのルールづくりとともに、看板設置のルールを定め、自分たちで見守りながら徐々に派手な看板をなくしていくよう、協定による取り組みで運用していくこととしている。このように街並みの景観づくりにおいては、改めて屋外広告物が大きなウエイトを占めていることを感じた。そこで、屋外広告物の規制状況はどうなっているのか、まち並み景観に配慮して建てるように

誘導していくには、どのようなことが問題になってくるのかなどを探るため、他県や他都市の事例や先進的に取り組んでいるケースを取り上げてみたいと考えている。今回は、平成12年に市町村へ権限を委譲した福岡県のケースを報告したい。

相当あるらしい許可手続きなしや基準違反

福岡県の場合、市町村に権限委譲したことで、県の権限は「広告業者の登録受付け」と「屋外広告物条例の改正等に関する事」のみで、「許認可申請」「設置の管理（広告物の点検、違反物件の取り締まり等）」は行うのは市町村の役割となっている。

福岡県都市計画課の景観担当の人に、屋外広告物の取り締まりの実態を聞いたところ「福岡県の場合、たぶん屋外広告物の半分以上が手続きなしで建てられているのではないだろうか。また、手続きをし、許可を得て建てられているものでも基準をクリアしていないものも相当あるのではないか」とのこと。

これは、市町村の屋外広告物の担当者は、他の業務との兼務であり、屋外広告物だけに係わってられない状況にあると考えられる。例えば、違反物件を取り締まる場合は、定期的に広告物を見て回り、違反物件を発見した場合は、その広告登録業者に連絡し、変更命令を出し、再度の許可申請と建設の立ち会いなどを行わなければならない。広告業者がスムーズに手続きを踏んでくれれば問題がないが、何度も交渉することになると1件の違反物件のみで多くの時間を要することになる。このため、なかなか違反物件の摘発には至らないのであろうと思う。また、市町村では定期的に禁止物件への広告物の撤去をしなくてはならないので、これも手間のかかる仕事となる。

民間や住民との協働による管理体制づくりが求められる。

屋外広告物が守られていない原因を県の担当者に聞いてみると「屋外広告物条例や規則自体が、事業主や広告業者に知られていないこと、違反広告物を取り締まるマンパワーは不足」と言われた。条例や規則の普及・啓発については、県が主体となって市町村と協力しながら息長く行っていけば良いと思うが、マンパワーの不足はなんともしがたい状況といえる。

取り締まりは、行政だけでは無理なので、シルバー人材や関心のある町内会等、あるいは観光地であれば観光協会など、民間や地域住民と協力し

表 福岡県屋外広告物条例のあらまし

<p>屋外広告物とは</p> <ul style="list-style-type: none"> ・常時、一定期間継続して屋外で公衆に表示されるもので広告板、広告塔、広告幕、立て看板、アドバルーン、はり紙、はり札の類、電光ニュース、ネオン、電柱を利用する広告物 ・屋外広告物に含まれないもの：街頭で散布されるピラやチラシ類、ショーウィンドーや自動車の内側に表示されるもの、駅や空港の構内に表示されるもの、音響広告やサーチライト <p>屋外広告物の規制（概要）</p> <p>以下のようなエリアや物件が対象となります</p> <p>禁止地域</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古墳地域及び墓地、九州縦貫自動車道と九州横断自動車道（展望できる500m未満の区域） <p>禁止物件</p> <ul style="list-style-type: none"> ・街路樹やトンネルなど広告物を表示してはならない物件 ・街路灯柱、電柱などはり紙やはり札又は立て看板を表示してはならない物件 <p>許可地域</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広告物の表示をする場合に許可が必要な地域を定めており、市町村長に許可が必要となる。 <p>適用除外広告物</p> <ul style="list-style-type: none"> ・規則で定めた基準内の広告物については、一定の基準内で禁止地域や許可地域の規制対象から除外される。
--

あって実施していくのが現実的でなかろうかと思う。

この民間や地域住民との協力した管理体制をつくっていくためには、日常から、住んでいる人が、少しでも心地よいまちを作ろうといった意識づくり、あるいは景観そのものに関心を持つような取り組みを、長期的な戦略をもって行っていかなければならないように思う。

幹線道路沿いでは市町村間の連携が必要

幹線道路沿いを改めて見てみると、必要以上に大きな看板、派手な色の建物の壁面に宣伝文句を広告している店など、もっとすっきりした方がよいのではないかといったケースが多々みられる。

多くの市町村にまたがっている幹線道路の屋外広告物について、一市町村が県の基準より厳しい

基準を設定しても、幹線道路沿いでは連続したものとならないため、広域的にみた場合にはあまり意味をなさない。このため、当初から幹線道路では、市町村間で連携した取り組みをしていく必要があると思う。これもなかなかハードルが高そうであるが、地域間の連携については県がリードしていくべきであろうと思う。

現在、福岡県では筑後流域において、「筑後景観憲章」を制定し、広域の景観づくり広域の景観づくりの先行モデルとして「矢部川流域景観計画（仮称）」を策定することとしている。その景観指針のひとつの戦略として、市町村を束ねた矢部川流域での屋外広告物の基準を策定しようとしている。これは、表示面積を県条例より厳しくし、屋上への広告物の全面的な禁止、色彩基準の導入などかなり意欲的な基準案を考えている。

実践に向けて、これから広告業者への啓発、合意づくりを進めていくこととなるが、その経過が楽しみである。

今後も、屋外広告物に関して先進的に取り組んでいる市町村をケースにして、もっと掘り下げてみたいと思っている。

（やまだ たつお）

第1回観光勉強会を開催しました

原 啓介

4月9日、第1回観光勉強会を開催しました。

講師は立教大学観光学部村上和夫教授で、参加者は自治体職員やメディア関係者等17名でした。会場の都合上、狭い会議室なので定員は15名だったのですが、すし詰め状態で熱気のある勉強会になりました。

第1回のテーマは、『いまの「観光」をどのように理解したらよいか』ということで、消費者が観光を通じて買いたいものは何なのか、パターン化した観光ビジネスの功罪と、それをどのように脱却するかといった内容をお話して頂きました。

以下、お話の中で印象的だったお話を抜粋して報告します。

消費者が観光を通じて買いたい物は何か

- ・消費者が観光を通じて買いたいものは、「自分の暮らしとはまったく違った非日常的なもの」というよりも、「自分の日常とは違った観光地の異日常」であり、日常生活において

「持っているか(経験したか)」「持っていないか(経験していないか)」という差異を競う体験を消費させる。

- ・例えば九州各地で開催されているひなまつりについて、お雛様はどこの家庭にでもあるもので、珍しいものではない。自分の家のお雛様と、観光地のひなまつりの間にある差異は「お雛様がたくさん飾ってあるか否か」ということであり、観光客はその差異を買っている。
- ・また、人は直売施設で野菜を買うだけでなく、「新鮮で美味しいものを買ったという経験や満足感」についても対価を支払っており、商店街・朝市観光では「自分の暮らしとは異なる現地の人の暮らしに触れる体験」を買っている。
- ・観光地側は、「観光地の普通の暮らし」をどう見せ、「観光客の普通の暮らしとの差異」をどう伝えていくかがポイントになる。パターン化した観光ビジネスは何をもたらずのか
- ・商品やサービスがパターン化するメリットとして、「明確な単位を表現できる」「明確な価値(価格)を表現できる」「パターン化はブランド構築の第一歩」といったことが挙げられる
- ・デメリットとしては、「わかりやすい・まねされやすい」「市場規模が大きくなり、競争になる」「流行がおこり、飽きられる」などがある。
- ・観光用語に「モジュール」という言葉があり、例えばツアーの中の各行程、食事のメニューのように、入れ替え可能で部品のような共通性を持つ要素のことを「モジュール」という。例えば、“イベント”といったフレームのもとで、“企画”や“食事”などのモジュールを提供する。
- ・観光がパターン化した場合、組み合わせの相性や効果を考えながら、既存のフレームのもとでモジュールを入れ替え、観光の枠組みを再構成することで、“観光への飽き”から脱却できる可能性がある。

村上先生のお話の中であった「観光地の日常を見せる」ということや、「既に存在する枠組みのもとでモジュールを入れ替える」というのは、観光地側にとって比較的实现しやすく、コストも

かからないため、これからの観光計画にとって非常に大事なポイントになるのではないかという気がしました。ただ、そこで問われるのは観光地の日常の楽しみ方やモジュールの組み合わせの伝え方のセンスをどう磨くかということだと思います。それについて会場から質問が出た際、先生から「女性誌や専門誌、少し高級な生活誌の記事と広告の組み合わせのセンスやパターンが参考になる」という回答がありました。例えば、本物志向の女性を観光のターゲットにする場合、こだわりを持つ大人の女性が読む雑誌の記事の周辺にどのような広告が載っているかを見ることで、ターゲットと商品との相性が見て取れるそうです。そのお話を聞いてから、最近たまに女性誌を見ています。女性誌売り場は少し照れますが...

(はら けいすけ)

第16回よかネットパーティー報告

吉田 佳祐

今年もよかネットパーティーを開催しました。よかネットパーティーは、参加者が自慢の一品を持ち寄り交流の輪を広げる、そんな「ひとつけ」をするパーティーです。パーティーは、今年も警固神社で行いました。昨年建て替えた畳の間でしたが、今年もまだ木の香りがして、さわやかな会場でした。毎年よかネットパーティーでもらうお皿を何枚も持っている、という常連の方から、今回が初めての方まで、80名を超える参加者が集まりました。

会場には、高菜ちくわ、いのししはむ、のむヨーグルト伊都物語、野イチゴ入り杏仁豆腐、土佐の酒等、数多くの個性あふれる料理が集まりました。よかネットメンバーからのひと味は、あさぎりベーコン、甘夏ジュレー、骨まで食べられる魚等が集まり、なかでも、毎年恒例の山田特性ぎょうざと燻製は、ボリューム・見た目ともにインパクトが強い一味です。

参加者は、おいしい料理・お酒を片手に、新しい出会い、そして懐かしい顔ぶれとの再会を楽しんでいました。

にぎわう実演販売および魚加工品のセリ

今年もよかネットパーティーでは、特産品コーナーの他に、実演販売とセリのイベントが行われました。



始まって30分後にはひとだかり



濃厚でとてもおいしかったです



ミズイカ、明太子のセリが行われました

パーティーが盛り上がり、会場内の熱気が高まった頃、ワサビ菜の調理の実演が行われました。手際よく面白い話と共に進んでいき、ワサビ菜を包丁で叩く際に、「性格のきつい人ほどワサビが立つ！」と説明があると、どっと会場が盛り上がっていました。

パーティーも佳境に差し掛かった頃、ミズイカと明太子のセリが行われました。セリは値段の高い方から低い方へと順に下がっていく、福岡の漁港で行われている本場のセリでした。安い値段から段々と値段の上がっていく、オークションとは全く違う感覚で、少しとまどいましたが、声のトーンなど市場の雰囲気を感じる事が出来る貴重な体験となりました。明太子は売値で1万円もする品物だそうですが、1万円から始まったセリは、あっという間に値引きできる限界の2千円まで値段が下がり、次々と買われていました。

初おもてなしでも楽しめたパーティー

私は、今回が初めての参加で、盛りつけコーナーで、食材のカットと盛りつけを担当していました。運営担当は忙しく、いつの間にか終わっているよと、話には聞いていたのですが、話の通りあっという間の一日でした。

盛りつけコーナーでは、受付を済ませ、メッセージを書いた参加者が次々に料理を持ってきま



ワサビ菜の実演をされました

す。次々に運ばれてくる料理にとまどいながらも、ひたすら食材を切り続けていました。どう切るのだろうという食材、切ると包丁がベトベトになる食材まで様々でした。

盛りつけた料理を、テーブルに品物を持って行くと、会場全体が盛り上がり、参加者は皆、会話を楽しんでいました。私も、料理を運び持ち場に戻る間に人を紹介され、紹介して頂いた人からまた人を紹介され、と沢山のひとと話すことができました。また、私があまりに慌ただしくしていたせいか、「お疲れ様」と、お酒をついで下さる方、「よく働くね」と盛りつけコーナーまで来て、話しかけて下さる方もいて、初めての参加ながらに沢山のひとと話す事が出来ました。

盛りつけ担当は、常に動き、忙しかったですが、持ってこられたばかりの料理をつまみ食いできるのは役得で、数え切れないほどの沢山の種類の料理をいただきました。おいしい物ばかりで、本当に幸せでした。また、沢山のひとから面白い話を聞き、繋がりを持つ事が出来て、充実したパーティーとなりました。次回は、もう少し余裕を持ち、新しい出会いを楽しみたいと思います。

(よしだ けいすけ)

皆様から寄せられた「よかネット」へ
のご意見、近況などの紹介（敬称略）

有楽町、横浜では「パール」がたくさん見受けられるようになりました。私の気に入っているパールは、2007年5月オープンです。若い女性が昼から飲んでいますが、ちなみに営業時間はpm 2:00 ~ am2:00です。

（横浜市 小林 憲一郎）

マスメディアでは知ることができないような、九州のホットな動きを知ることが出来るので楽しく読んでいます。

（所沢市 山本 正典）

大きな仏壇を買ったら、部屋が本堂になりました。大きなアコースを買うので、部屋の壁が消えます。スポーツしていると言われれば、毎日通勤しています。特に、池袋・新宿の乗り継ぎは、生身スタントのバイオレンス・アクションです。ねんきんとくべつ便はまだ来てません。

（豊島区 佐藤 正憲）

地域に根ざした情報で、かつ自ら体験されたことを掲載されているので興味深くいつも読ませていただいております。Always 3日（サンデー）ですが、人生、リセットを完全にできず、結構多忙です。

（我孫子市 山口 佐由喜）

九州のことを懐かしく思い出しています。なんだが一番先頭を走っておられる集団ではないかと感じています。特に、農・林・漁とのつながりの大切さが21世紀のまちづくりあるいは生活作りだと思います。

（中央区 中田 雅資）

4月より職場が変わりました。同じ生協ですが、心機一転頑張っています。「よかネット」を楽しみに読んでいます。斬新な着眼点に感心しています。

（千葉市 北 昌司）

楽しみに読んでいます。特集もいいし、それぞれのレポートも九州その他の地域での活動が見えてきます。よかネットのメンバーの顔が思い出せてニヤニヤしながら楽しんでいます。これからもよろしく願いいたします。

（世田谷区 山野 宏）

想い出づくりセンター構想、興味深かったです。

遺影撮影会、展示会は湘南市のレガート法人「らく」さんの取り組みでした。

（湘南市 溝口 弘）

60歳定年から約一年半。嘱託で働いています。

「よかネット」はいつも切り口が面白く、参考になります（頭がフレッシュになります）。

（千代田区 菅野 由一）

私の携わる商業ビル関係の分野は、サブプライムローンの影響で、凍り付いています。こうした中でも豊かな未来の想像のためのコンセプトを描けるのが課題です。海外事業のオーストラリアは調子が上向きです。

（渋谷区 渡辺 寿彦）

関西は三空港問題で、特に大阪国際空港は大きな影響を受けています。今年は、5年目になりますが、元気にやっています。福岡空港も当空港と同様、市街地の便利の良いところにあり、航空機が低騒音化した昨今、大いに利活用頂きたいと思います。

（高槻市 日野 博彦）

系乗さんのプラン“年寄りと若者が協力して”を高校生の息子とその友達に紹介して、ある企画を進めています。

（大阪市 池田 順一）

まだ何年か先の事と思っていましたが、思いがけず、先月、海辺の別荘地に引っ越しいたしました。毎日素晴らしい景色を満喫しています。

（志摩町 山本 博一）

定年退職後は、パートタイムの仕事やカルチャーセンターなどで学んだりしています。現職時代は食料関係の仕事をしてきましたので、その関係の歴史などの調査を考えています。

（久留米市 秋山 正信）

無農薬・有機主体の野菜作りを初めて早3年、今年は70坪の畑作りに精を出しています。場所は、志摩町の浜防の里（糸島郡）です。一緒に野菜作りをされる方を募集中です。

（福岡市 櫻井 弘）

最近駅に立って感じることは乗客のマナーの悪さ。なぜこんなにまでなったのか、只今いろんな資料を読んで、研究中。そんな中、右川治氏の「阪急電車」という本に出会い、いずれも同じ状況であることを知り、胸をなでおろした。4月に入り、新入学生も新たに加わる。しばらくは、学生への苦言が飛び交いそうである。

（柳川市 平川 硬一）

4月から北九州市総合保険福祉センター所長として、8年ぶりに保険福祉行政の世界に戻ってきました。ここは「市民の命と健康、安心を守る」部署で、保健所や急患センター障害福祉センター等が入っています。また、医者などの専門・技術職の多いところでもあります。

(北九州市 丸山野 美次)

西部ガスから九大に出向して2年目に入りました。4月からユーザーサイエンス機構に移り、ファシリテーションのカリキュラム化を担当します。

(福岡市 加留部 貴行)

開駅(道の駅の開始)から8年が経過しましたが、最近では、当社の3倍もの駐車場を整備した直売所が周囲にでき、競争が厳しさを増しています。他所にない特色を出すのに腐心する毎日です。

(豊前市 白石道雄)

我が家から5分歩くと「つくし夢畑」というJA直売所があり、オープンして特産品も増え、客もかなり遠くからやってきている。スーパーと違い、本当に日々の食材を扱っている雰囲気楽しい。

(太宰府市 下瀬美 彬)

いただく情報をむら・町交流のヒントにさせて頂いています。一昨年よりJICAの研修を受け、海外より来てもらっています(昨年18カ国20数名)。“来る人から何を学ぶか”をテーマとして取り組んでいます。

(阿武郡 石松 博之)

「直売所」の記事、興味深く読みました。奥方同伴のドライブでは「道の駅」があれば必ず寄りますし、何も買わずに出てくることはありません。今後、このような場が果たす役割が多様化、多機能化する方向に期待したいですね。身近な情報、楽しみにしています。

(鳥栖市 陣内 和彦)

当店のお客様も県外客がほとんど。芋焼酎好きの女性が増加しているのを実感しています。

(鹿児島市 浜園 幸子)

「直売所全盛の時代」は面白かった。生産者にとって、消費者の顔が見えるようになった事は大変革である。地産の物だけ限定するのか、“他産”の物まで並べてスーパーと張り合うのか、レポートして欲しい。

(南阿蘇村 高島 一純)

鹿児島は篤姫で盛り上がっています。新幹線のお客様もおかげさまで、増えているような気が…。大河ドラマを機に、各地の隠れた名所にスポットライトが当たればいいなと思うこのごろです。

(鹿児島市 津高 守)

大分県においても直売所(道の駅、里の駅)は大人気です。安心院の「小の岩の庄」という里の駅は、国道500号線で別府へ30分という所に位置し、別府の旅館からの仕入れに大いに使われています。すっぽんうどんも人気です。ぶどう、イチゴも季節感あふれる果物もあふれるほどあります。

(宇佐市 佐藤 陽子)

前号の糸乗さんのコラム、大変興味深いものでした。私の祖母が倒れて2年(75歳)左半身が動かず、田畑は親せきをお願いしています。ここ数年、葬式に出る機会も多く、故人の一生や、戦争体験、大陸の暮らし等聞いておけばよかったと悔やむこともありました。「21世紀の喜ばれること」は自分の商売のヒントにもなりそうです。ありがとうございました。

(伊万里市 牧山 彰)

福岡・佐賀両県でのケーススタディがなされていますが、状況は熊本も全く同じで、興味深く拝読しました。農水省補助で建設が進み、国交省道の駅事業でも整備が進み、いまや群れをなすほどに整備されました。しかし、運営側の高齢化・過疎化による担い手不足は深刻で、新たな問題を惹起しています。

(熊本市 青木 勝士)

デイサービス、学童保育勤務週4日間も一年が過ぎました。残りの日は、畑作りとボランティア(民生児童委員、学校評議員、交通安全指導員)等々で地区を走り回っています。

(玉名市 高群 正春)

近刊の和菓子本に小社出版の「羊羹百話」の事が取り上げられました。平成3年300円(文中では500円)で売り出したのですが、著者が古書店で求めた価格は4000円。和菓子情報がそれだけ貴重かつ稀少である事が証明されたわけですが、小社関連出版物は他に3種以上あり、その一部も高い評価であることに複雑な思いです。

(佐賀市 村岡 安廣)

農村集落が経営する直売所
 有限会社「福ふくの里」
 ~ 農家の収入と地域の雇用を産んだ ~
 本田 正明

「福ふくの里」は、福岡市から西に車で 40 分ほどいった二丈町の福吉地区にある。

私が初めて直売所を訪れたのは 3 年前。そのころには、すでに年間 6 億円以上の売り上げがある希有な直売所だった。当時私は、糸島地域に移転してきた九州大学と地元の接点をつくるために、地元事業者を回っていて、社長である市丸さん（当時）に話を聞いた。

そもそもは九州大学との連携ニーズについて聞いていたのだが、福ふくの里自体の取り組みが農村集落の地域づくりのモデルとして非常に興味深いものだったので、気がつけば 2 時間近くお話をしていただいたことを覚えている。今回の内容はその時のヒアリングに基づいているが、当時から 3 年の歳月が過ぎており、周辺地域に大規模な直売所が立地するなど環境の変化も生じているため、現在の副社長であり、出荷する農家でもある山崎さんに近況について話を伺った。

地元の年間 6 億を売り上げ、地元の 20 人の雇用を生み出す

直売所設立のそもそものきっかけは平成 8 年（1996 年）にさかのぼる。二丈町は JR 筑肥線の駅が 5 つもあるほど東西に長細い地形であり、特に福吉地区は海と山が近いため、田んぼの面積が少ない。主要産業であるミカンも低迷し始めたので、地域をどう活性化すればいいかというのが、地域の大きな課題だった。

福吉地区の 6 集落の各役員が集まって福吉地域推進協議会をつくり、その活動の一環として、直売所事業がスタートする。自己資金は、協議会の 6 人が保証人となって JA から 4 千万円ほど借りたのと、福吉の集落からも 49 人に投資してもらった。直売所に併設している鮮魚館は農業関係施設ではないので、すべて自己資金でつくっている。平成 15 年に有限会社「福ふくの里」を設立し、開業する。うまく時流に乗ったこともあり、初年度（H15 年）から 2 億 4 千万円売り上げる（損益分岐は 1 億 2 千万円）。2 年目は 4 億 7 千万円、3 年目は 6 億円を超えた。



農産物直売所福ふくの里

一番売り上げているのは養豚農家で 2 千万円を超えている。1 千万円以上売り上げる人も 10 人以上いるそうだ。収入の増加は農家の励みにもなっているようだ。出荷している組合員は 270 人ほどおり、職員・パートを含めて約 20 人が働く場にもなっている。

市丸さんの話だと「パートは主婦の人だが、農家の人はいません。特に農家を断っているわけはありません。最初は福吉校区の人だけ雇っていたのですが、運動会や祭りのときに全員が休みたがるので、雇用を二丈町に拡大しています」ということだった。

福ふくの里のウリは「鮮魚」

福ふくの里の魅力はなんといっても鮮魚だ。福ふくの里では福吉漁協の水揚げの 3 分の 1 を取り扱っている。直売所全体の売り上げは魚 35% 程度、野菜は 45% 程度で、残りが加工品であり、野菜の売り上げの方が多いが、直売所に足を運ぶ要因としては野菜よりも魚の方が大きい。時化が多く魚が少ないときほど売り上げが下がるそうだ。「お客は天気予報をよくみていて、波が 2m 以上あると魚があるかどうか電話してきますよ。そして、実際の客数も少ないですね」「スーパーで野菜が高いときなどは、魚がなくともお客が入るときはありますが、基本は魚がメインです」

魚を三枚までおろすサービスはニーズが高く、待ち時間が生じることもしばしばである。調理してもらえないなら、買わないでいいというお客は多いそうである。

「調理人は 2 人ほど雇っています。後は漁師の奥さんにきてもらっています。平日は 6 人、週末は 10 人体制です」「漁師の船だいたい 5 時に上がってくるので、漁師の奥さんたちが港に帰るため魚の調理は 3 時半までしか受け付けていません。時間はできれば伸ばしたいのですが、なかなか難しいですね」

消費者が安心できる安全な野菜づくりへのこだわり

安全な野菜づくりの取り組みも早くから取り組んでいる。毎月1回、使った農薬をすべて記入した栽培履歴を全部出させるようにしていることと、年に2回（春・秋）ほど抜き打ちで、検査センターで残留農薬のチェックを行っている。また、安全性の管理を徹底するため、外部からの仕入れ商品は野菜を1件、花を2件に限り、他は扱わないようにしている。

このようなチェックを行っていること自体は消費者に知らせていないが、周辺に競合する店舗が多いので、野菜の安全性をもっとアピールしてもいいのではという意見は内部にあるそうだ。

他にも減農薬と有機肥料の指導を行っており講習会なども年に2回ほど開催している。

スーパーに常時ない野菜をつくろう

前号の記事にあるように、糸島地域ではイオンや伊都菜彩など大規模なスーパーや直売所が立地するなど、厳しい競争環境に置かれている。それらの影響について山崎さんに聞くと、「売り上げは、一昨年から昨年にかけて1割ほど減りました。客数は変わっていないのですが、土日の客単価が下がっています。きっと直売所をぐるぐると買い回って、安いところで買うようにしているのだと思います」といわれた。また、資材等の高騰から野菜の値上げをしたいという農家の声もあるそうだが、競争が増し、売り上げが減る中での値上げはなかなか難しい状況である。

そうした周辺を取り巻く環境が厳しさを増す中、福ふくの里が取り組んでいるのは、「スーパーに常時ない野菜をつくろう」というものだ。

直売所の周囲を圃場整備された優良農地に囲まれているため、直売所の拡大余地がなく、飲食や加工品づくりの事業のやり手も出てこない状況である。競合する店舗との違いを出すため、カラピーマンや芽キャベツなど、すぐには真似されない栽培技術の高い野菜作りを進めている。

それでも「何をつくればいいのか相談されます。教えれば結果的にみんな同じ物をつくってしまい、値段が下がってしまうから、自分で考えると言っているんですが……」と山崎さんは、取り組みの難しさを語った。農家もそれぞれ自分たちで消費者の関心やマーケットを観察したり、他に真似されない技術を磨くなど、自立が求められているようである。（ほんだ まさあき）

福岡県内に新たにオープンした道の駅2カ所に行ってみた

原 啓介

4月から5月にかけて、福岡市から約1時間～1時間半の距離に、道の駅が2店舗オープンしたので、早速行ってみました。

宗像市の「道の駅むなかた」は4月半ばにオープンしたばかり。木造平屋建てで、敷地面積約13,700㎡。市商工会と観光協会、農協、漁協等が出資した「まちづくり宗像」という会社が運営していて、新聞によると、国と市が約6億5000万円を投じて整備したそうです。

日曜日の午後1時頃に行ったところ、非常に多くの客でごった返しており、店員の方に聞くと、多いときはレジ通過で3,000人、一日約10,000人の入り込み客があるそうです。開店直後のためか、売り上げは一日500万円にものぼるとのこと。これは予想を大きく上回る来客だそうで、商品もすぐに売り切れ、施設案内のパンフレットも切らしており、周辺の道路は大混雑でした。

直売所に併設したレストランは、地元企業20社で共同出資した「株式会社玄洋むなかた」が運営していますが、こちらも既に品切れで閉店状



道の駅むなかた。休日の昼過ぎに行ったところ、魚はほぼ売り切れ状態でした



あんずの里、日曜日の午後2時の様子。ほとんどのものが売り切れている

態。魚の煮付けやひじきといった小皿料理やみそ汁、ご飯などを一品売りしているそうです。

道の駅むなかたの周辺には、福津市のあんずの里という直売所があるので、福岡方面に帰る途中に寄ってみたのですが、こちら売り切れ状態で、じゃがいも、タマネギといった日持ちのする野菜以外は、ほとんど何も残っていませんでした。

オープン効果は周辺の観光スポットにも確実に波及しているようです。

久留米市に5月末にオープンした「道の駅くるめ」は、総施設面積 10,000 m²、事業費約 13 億円を投じて建設されています。ここも道の駅むなかたと同様、自由に身動きがとれない程の来客で、パートの方に聞くと、休日は一日 3,000 ~ 4,000 人来ているようです。飲食スペースには、久留米市で居酒屋を数店舗展開している経営者が「ほとめき庵」という食事処を出店しており、ここでも小皿料理を自分の好みに応じて一品買いする方式がとられていました。一昔前の道の駅・直売所では、農家料理バイキングが多かったようですが、近頃は流行が変化しているのでしょうか。

今回立ち寄った直売所は、どこも予想を上回る盛況ぶりで、新たにオープンした直売所の周辺の直売所でも品薄状況が続いているようです。道の駅むなかたでは、品薄状況に対応するため、出品する生産者の追加募集も考えているということでした。

現在の状況は一過性のものなのか、それとも今後も続くのでしょうか。直売所という業態を持った競合店だけでなく、都市部のスーパーでのインショップや宅配サービスなど、新鮮で安全な農産物を提供するためのサービスも多様化するなど、ライバルが次々と出現しています。さらに、直売所に行くためのガソリン代も値上げするなか、現在の好況がいつまで続くのか、今後の動向の見極めが難しいかもしれません。

最近、直売所周辺地域の産品だけでなく、品薄状況に対応するために地域外からも商品を入荷している状況を良く目にするようになりました。

直売所は地元で取れた農産物を地元の人に販売するというスタンスや、生産から消費までの距離・時間の短さが支持されています。直売所ファンの一人としては、直売所がスーパー化し、「わざわざガソリン代を払って直売所に行くなら、近所のインショップに行くよ」という人が増えることを心配しています。(はら けいすけ)

私の四国遍路“おもしろい”と“うんざり”の旅日記

糸乗 貞喜

なぜ四国遍路へいくのか

<木喰上人に導かれた?>

なんとなく、一度は行ってみたいと思ってはいたが、「行かねばなるまい」とはっきり思い始めたのは木喰仏を訪ねだしてからである。といっても、木喰仏との初めての出会いは、昭和 50 年(1975 年)のことであるから、30 年ぐらいは経っている。この時の印象は、よかネット 5 号(1993 年 9 月)と 70 号(2004 年 7 月)に書いているが、それまでに見たいろいろな仏像とは全く違うものだった。それは、意識的にも外形的にも、覆いの全く感じられない、気持ちがそのままに伝わってくる仏様だった。それ以来、書物や実際の木喰仏巡りを含めて、木喰仏遍歴は今にいたるも止まっていない。

その時分かったのは、木喰上人が四国を三度廻っているということと、自分の故郷に“四国堂”を造っているということであった。その四国堂には 2004 年 4 月に訪れている。私の場合の四国遍路への思いは、木喰仏との関わりが大きい。

毎年多くの人びとが四国遍路に出かけているし、団塊の世代の停年論が出てから、一層、四国遍路がもてはやされている。「なぜ四国遍路に行くのか」ということは、そういった社会現象として見なされていることでもあるが、私自身の興味は次の三点である。

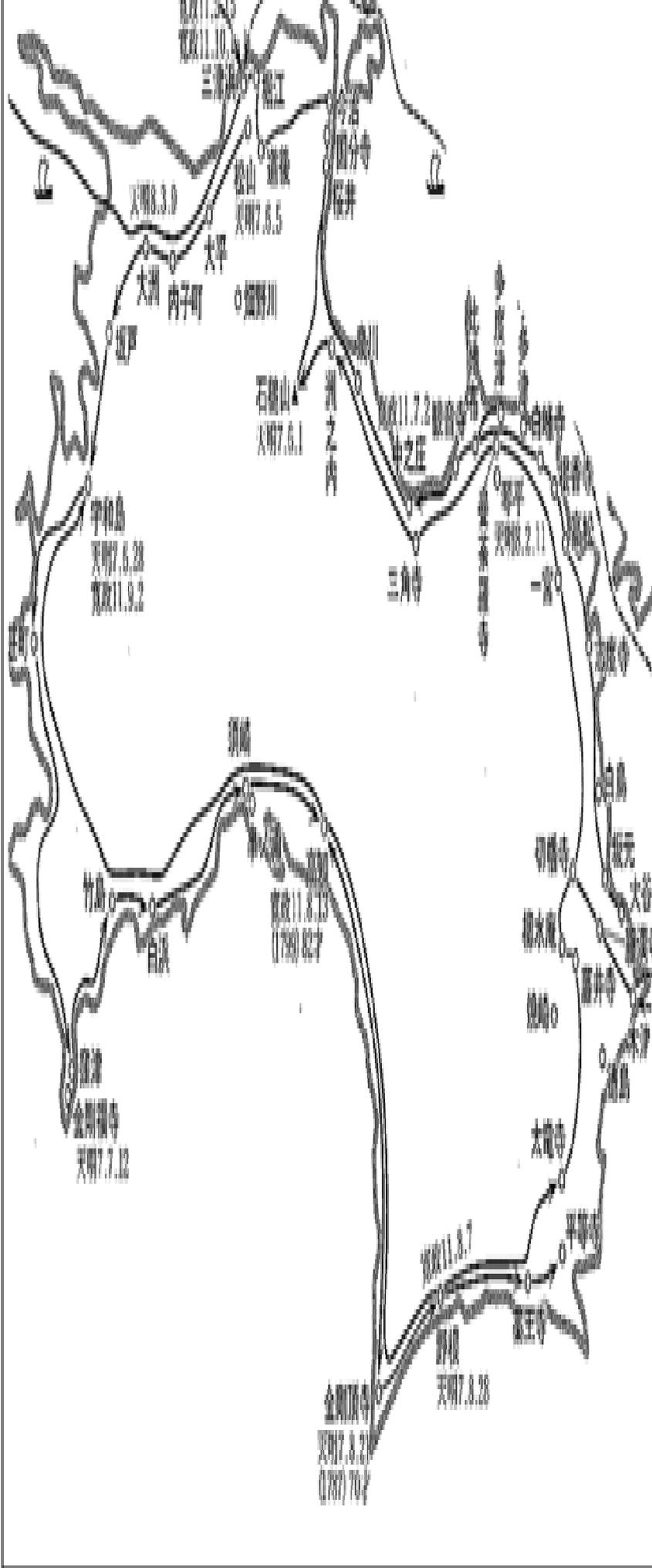
昔の人たちは、どんな気持ちで遍路道を歩いていたのだろうか

どこから来て歩いたのだろうか

木喰上人のたどった道や、木喰仏に会えるのだろうか

実際の話、木喰仏を探すゆとりは全くなかったが、昔の人たちが歩いたと思われる路を、出来るだけ多く歩くようにした。その中で、私の郷里の人が建てた“遍路道の道標”にも出会った。その時、いずれこれを建てた人の在所へ訪ねたいと思った。実際に、この 6 月 1 日にいつてきたのだがそれはいずれ書くことにする。

もちろん、現代の人たちが、四国遍路ブームといわれる中で、なぜ四国遍路に来ているのかにも



二人が連なって歩いたことの意味
 遍路は 自転車やバイクで廻る巡
 行カーを使った巡拝。最も多いの
 なる巡拝である。断っておかねば
 歩き遍路”といっても、野宿(善
 の泊まりも含む)や車内泊と宿坊
 などがあるが、私は民宿・旅館派

遍路に来る人は、年間何人ぐらい
 聞いたところでは 15 ~ 20 ~ 30
 歩き遍路の数も、1200、1400、
 々々ある。

ら 88 番大窪寺へ向かう中間ぐら
 の交流センター」がある。そこで
 いただき、資料も貰ったのであるが、
 うになっていた(括弧内は歩きの

4,667 人 (1,329)

3,438 (1,693)

3,777 (1,853)

2,674 (2,770)

3,150 (3,229)

が見えたので、「ここは役所がか
 ですか」と聞いたところ、センタ
 省関連の補助金でできているとの

センター訪問者(用紙に自主記
 観光バスによる巡拝者が立ち寄
 であろう。意味があるのは、括弧
 自己申告であるし、四国全部を廻
 どは分からない。とはいえ、いろ
 いた感じでは 3000 人くらいだろ

木喰上人が歩いた四国道路のルート

参考文献:別冊太陽 柳宗悦の世界



25番津照寺の門前で出会った人、頑丈な特製遍路車？



これは山道にあたり、険しくもあるがいやな気はしない。結局私は、バスツアー、マイカー、バイク・自転車、歩き遍路を合わせて 20 万人という見方で、内 3000 人が歩き遍路だと思った。

< 野宿をする歩き遍路 >

札所の納経所へ納経帳を持って行くと、「ご苦労さんです」といわれることが多かった。声をかけられるのは歩き遍路のようだった。つまり、歩きとそうでない人は、風体と荷物の量ですぐに区別がつく。その上、野宿の人は寝具なども必要なので、荷物はもっと多くなる。

若い人で大きなザックに一杯詰めて担いでいる人が野宿派である。確かめたわけではないが、2 ~ 3 人いた。一方、高齢で野宿派の人に 4 人遇った。最初は、徳島市内で小さい乳母車程度のを引いて逆打ち方向へ歩いている、80 代後半ぐらいの年格好の小柄な人だった。私自身歩き始めて 4 ~ 5 日目であり、通り過ぎてからハッと気がついたぐらいである。25 番津照寺の門前で、お願いをして写真に撮らして頂いた。「話を聞かせてほしい」と声がでかかったが遠慮してしまった。もう何度もずっと廻り続けている方のようなった。

もう一度、40 番観自在寺の山門の石段下に、



里の道路。右の山から小鳥の声が5種類ぐらい聞こえ、左の家の横に広がる田から蛙の歌が聞こえた。これを見ると、いまでも聞こえる

多くの荷物をくくりつけたキャスターがあった。この主は男女二人組で、街で出会った時、少し話し合った。一年のかなりの期間回り続けているとのことだった。

< 四国の歩き遍路はガソリン税の受益者？ >

おそらく大多数の人は、「遍路とは昔の人たちがたどったところを、モクモクと歩くこと」くらいに考えていると思う。私も「まさか国道を歩くのが大半だ」とは思っていなかった。現在の遍路道を私の感じで整理してみる。

昔遍路が歩いた道 = 山道、あぜ道など
 " " = 集落内、集落間の道舗装・簡易舗装されていることが多い

舗装された市町村道

県道

国道

国道は、地形を無視して山を削りトンネルを掘り、橋を架けていくので、勾配は緩やかになり、く知らないが広い歩道もついている。大型の運送用トラックに煽られて、菅笠が飛ばされそうになったことが何度もあって困ったが、遍路が歩くにしてもかなり楽に歩ける。県道も、元は国道だったことが伺えるところも多く、立派な道が多いが、歩道がほとんどなくダンプカーなどに困らされる場所もあった。

歩く立場からいうと と は一番つまらない。同行はクルマだけであり、対話も交流も皆無だ。「同行二人(どうぎょうににん)」が歩き遍路看板だが、同行(どうこう)トラックが実態である。「歩き」の実態はクルマと同行して追い越され排気ガスをかけられながら行く苦行である。

私の気分であれば、 と が一番楽しかった。



県道はこんな道も多かった。嫌な道ではない
 ここは山道もあり、登りと降りを繰り返すので効率も悪いが、昔の遍路の気分を感じることが出来るような気がした。もちろん、木喰上人も歩いたに違いないと思えた。しかし山道・里道は、全行程の 20 パーセントもないのではないかと思う。

< 遍路道ってどんなみち？ >

37番岩本寺へ行く途中の、焼坂峠を越えるところで道に迷って泣きたくなった。歩き遍路は歩くのがスキで歩いているように思われるかも知れないが、遍路ほど歩くのが嫌いな人種はいないように思った。そのことがコースの取り方に現れている。

「道に迷っている」と確信した時、考えたのは「今歩いている道は集落との関わりが薄いのではないか」と思った時である。

道に迷って一番困るのは「間違っていなかった時、バックしても、もう一度ここに来るとしたら二重の損だ」という強迫観念である。迷う時は大体、20 分もすると気になる。の山道は赤い目印がたくさんあるので迷うことは少ない。迷いやすいのはの集落間道路で、これが林道として付け替えされているところが怪しい。気になりだして 20 分ぐらい「遍路道はどうして出来たのだろうか」「遍路が歩き出して札所が出来たりはしない。その逆だ」「寺より先に人間が住んだ」「まず集落と集落の交流のための道が出来たに違いない」「となれば遍路道は集落間道路の名残に違いない」「今歩いている道には向こうに集落がある気配がない」などと、のたのた歩きながら 20 分ぐらい考え、立ち止まってもう一度腹に収めて「引き帰そう」となった。

遍路道保存協会という団体が、山道には立て札などを、一般道には赤いシールを貼っており、さらに詳細な地図も発行して、それが歩き遍路の



国・県道はこんなところが多い。右側は狭い側溝で、危険を感じながら遍路が歩く。地元の人では抜け道が分かるので通らない



これも国・県道。こちらでは歩道だけでも車が 2 台くらい通れる

助けになっている（地図には方位とスケールという点でかなり問題があり、日頃から地図というものに馴染んでいる人間には使えない）。この協会も標識をつける際に苦労をしておられると思うが、昔からの集落間の道が、林道新設などの際に、クルマを前提としたカーブや勾配で造成されたために、昔の集落間交流の合理性と違ったものになっている。

旧遍路道が林道でグジャグジャになっていて、困ったところが 45 番岩屋寺に行く途中であった。とはいえ、このような「迷う」ということも、わかりやすい国道ではなく、昔の遍路たちの追体験をしようと思ったから出来たのであって、楽しい道中ではある。

< 遍路は歩き座禅みたいだな、と思った >

歩き遍路で廻っている時に、パスツアーのことを「あれはスタンプラリーだ」と揶揄気味にしている人がいたが、私はそうは思わない。初めての人間が生意気に言うべきことではないかも知れ

ないが、人それぞれの廻り方でいいのだと思っている。「全部歩いて 88ヶ所を廻った」だけが四国遍路のコンセプトではないと思う。それよりも「如何に早く、ラクに廻る」というのも、「札所を打つ」ということに特化したスタンプラリーである。

私は、1番から歩き始めて2～3日目に、強い違和感を持った。それは「遍路って国道を歩くことなのか」ということであった。「こんな道は戦前どころではない、1960年以前には誰一人として歩いてはいなかったのではないか。御大師さんとも関係がない。」という思いである。

遍路には二つの意味があるのだろう。一つは、88ヶ所の巡礼、もう一つは「歩く」ということである。昔はそれが一つになっていた、というよりも分けようがなかったのである。今は手段が出来たのだから、観光バスツアーにしる、マイカーにしる、自分が出来る方法を選べばいいのだと思う。

早速私は、「国道を歩く時は、バスがあれば利用しよう」と考え、それを「輪を使って速く走る」という意味で“輪頓之術”と称することにした。とはいっても、うまい時間にバスは走っていない。国道も随分歩かねばならない。それ以後、宿でバスの時間を聞いたりすると、「昔はバスが随分走っていて、遍路さんも乗られたのですがねえ。今は医者に行くのも大変で……」という返事が来た。クルマ社会になり、道路は出来ても地域の人には不便になっているのである。

一つだけ困ることがある。四国遍路にいつてきたというと、必ず「全部歩いたんですか」と聞かれる。それで「いやー、ところどころ輪頓之術を使いました。トラックが多く排気ガスの国道はかなわんし、楽しくなかったので、バスに乗ることもあったのです」と答えることにしている。四国で聞かれた時には「国道は排気ガスもあるし、かなわんでバスがあれば乗っているのです」と答えても別に違和感はない。四国にそれほど路線バスは通っていないということが分かっているのである。とはいえ、歩き遍路には「全部歩き教」の人が多く、この宗教は四国遍路の妨げになっているように思った。このことは「四国遍路の地域経済学」という項で述べたい(なお、ネットテレビdocodemoTV.jpの「人もうけ列伝」で私が遍路報告しています)。(いとりのり さだよし)

さかなの流通・販売についての勉強会を開催しました

～第1回 ものの売り方勉強会の報告～
雪丸 久徳

地域でとれる農産物や海産物、その加工品などをどのように売っていけば、地域が潤っていくのでしょうか。

まちの計画づくりだけでなく、産品をどう売っていくかといった、事業サポートも増えつつあるため、流通や売り方についての所員勉強会「ものの売り方勉強会」を始めました。

今回はその第1回目でテーマは「さかな」。福水協(福岡水産商業協同組合)の渡辺氏と日刊みなど新聞の富田氏にお話をいただきました。

卸市場

- ・卸売市場には、消費地市場(中央卸売市場)と産地市場(地方卸売市場)とがある。産地市場は、漁業者から荷を受け、地元で魚を供給する台所的役割(地元仲卸)と消費地市場に送る出荷仲卸)取引機能があり、消費地市場は、産地市場から集まった魚を消費者に流す機能を持っている。
 - ・産地市場の取引においては、消費地市場のほうが値がつく魚は消費地市場に送られるが、最近では、消費地市場が必ずしも高値がつくとは限らない。従来地域で水揚げされ需要があった魚が捕れなくなっていることもあり、産地市場に送られる傾向がみられる。実際に、九州で捕れていた南方型の魚が、秋田で水揚げされるなど、欲しい魚が揚がらない状況にある。
- ### 魚の取引相場・取引
- ・魚の取引は、卸と複数の仲卸で価格を競りあう「セリ」と、卸と仲卸とが1対1で取引する「相対」がある。最近では、量販店の影響もあり、市場内流通の主流が「セリ」から「相対」に変わりつつある。
 - ・セリの場合、魚の相場は、荷主の意向、前日の状況、セリの時間によって決まる。一番競りは高値がつく。
 - ・卸は魚をセリや相対で売った卸売金額に対して法律で決められた一定率の手数料が入る。水産物は5.5%以内と決められているが、農産物8.5%に比べると低い。今後、法律が改正され自由

化の流れがある。率を上げたい卸もあるだろうが、財力の有る卸は率を下げてくるだろう。

- ・市場の魚は売れ残させない。セリ人の判断で、買い手がつかないようにあれば財力のある仲卸に取ってもらう。以前は加工用に回していたが、今は採算があわないのでやらない。
- ・悪天候や自然環境の変化による不漁などの影響により水揚げ量は変動するが、魚の相場がさほど大きく動くことはない。近年は、小売や量販店からの注文を受けてから取引する、仲卸（仲買人）の堅実な動きがあり、川下（小売・料理店）の値が決まっているので、高値は出にくくなっている。
- ・流通の過程で高値がつくのは、アラなど希少性がある魚である。稀少価値という意味では、最近キビナゴが沿岸部で捕れなくなってきており、捕れても鮮度落ちが早いので、高騰してきている。
- ・東シナ海では1000種以上の魚種があるが、ほとんどの魚が商品化されていない。雑魚など、ツラだし（サイズ毎に選別）しにくいものは流通に乗らない。一方で価格と数量が安定していて大口ロットのものが、扱いやすく流通にのりやすいので卸は欲しがらる。

消費者の好み

- ・消費者の好み固定化しており、近年価格が安かったこともあるが、家計調査では、マグロ、鮭、エビ、イカ、ぶりの消費量が多い。本来、地域によって好みは違うはずだが、量販店等の影響で地域差は薄れつつある。地域特有の魚を求める消費者も少ないことや、供給されにくい（流通に乗りにくい）という悪循環もある。
- ・天然物を好む消費者が多いが、旬を過ぎたものは味が落ちる。天然物だからいつでも「おいしい、高い」とは限らない。5～6月の初夏の頃に捕れる天然の鯛は「麦藁（むぎわら）鯛」とよばれ味が落ちるのだが、桜の季節ということで“桜鯛”と名付けて高く売ったりするなどの、売り方の工夫がされている。

仲買人（仲卸）・料理人の求める魚

- ・仲買人の取引先が、量販店、水産業者、魚屋、料理店なのかによって、仲卸の個性が異なる。量販店からの注文を受ける仲買人は、大口ロットで規格が揃った魚を求める。取引先毎に好まれる魚・漁法・しめ方に好みがあり、それによって仲買人の求める魚も変わる。

- ・料理人が求める魚は、料理の種類にもよるが、料理人の出身地、刺し盛り等の時に細工しやすい好みの堅さ、使っているまな板・包丁の長さ、皿のサイズによって、魚・漁法・しめ方・サイズへの要望が異なる。料理屋としても、珍しい魚が欲しいのだが、欲しい魚が揃わない状況である。

ブランド化による流通

- ・魚のブランド化といっても今はネーミングだけのところが多い。ネーミングだけをして、市場に出してしまえば意味がない。生産、水揚げ、流通、小売まで、独自のルートを持たないとブランドの管理はできない。そういう意味で、養殖魚はブランド化しやすいが、市場に出したら他と同じ扱いとなる。単一魚種での拡大は難しいが、独自のルートを持てば、養殖魚は天然魚よりブランド化しやすいのではないかと。

魚の流通のしくみはこれからどう変わる

- ・市場で取引できないものが売ることができる直売所等、直接消費者に売る漁業者も増えている。今のところ、直売所の魚コーナーは、鮮度と安さへの期待感から多くの消費者から支持されているようだが、1年後のリピーター率がどのくらいかをみなければ、今後どうなるかはなんとも言えない。量販店の魚売り場（鮮魚コーナー）は、利益を出していないところが多い。

その他

- ・新鮮な状態で消費地・消費者に届ける流通技術は年々発達してきているが、今後はむしろ解凍技術の向上が大事である。
- ・トレーサビリティの導入は、孵化～稚魚～成魚までの成育過程がはっきりした養殖魚であれば可能ではないかと思う。えさや自然環境へのこだわりで、ストーリーをつくることも重要だろう。

以上、掻い摘んで紹介させて頂きました。

私自身、肉より魚派ですが、恥ずかしながら、今回のお話は初めて知ることが多く、大変勉強になりました。次号までには、これからの時代にあった魚の流通や漁業に対しての自分なりの意見が書けるよう、市場見学や現場の人の声を聞いてまわりたいと思います。

（ゆきまる ひさのり）

近況

ファシリテーションフォーラムに参加しました

5月末NPO法人日本ファシリテーション協会主催の「ファシリテーションフォーラム2008」に参加し、とてもおもしろい話し合い方法を体験しました。

まず、参加者が円になって座り、この場で話し合いたいテーマを持つ人が円の中央に出て行き、テーマを紙に書き、「私の名前は です。こんなテーマについて話し合いたいです」と発表します。テーマがある程度出たら、その他の人は自分が話し合いたいテーマの場所に移動し、そのテーマについて話をします。しかし、ずっとそこにいなくてもよく、ある程度話に関わったら、他に興味があるテーマに移動してもよいというルールです。進行や記録係を決めないこともあるそうですが、今回は最後の発表に向けて誰かが記録することになっていました。この手法は「オープンスペーステクノロジー」というそうです。

その分科会は約30~40人参加していて10の方がテーマを出されました。各テーマを話す人数は途中で移動できるのであえて均等にはせず7人、5人、3人などばらばらでスタートしました。

私は、初めてだったので、途中で抜けられるかな？途中から新たな人が加わって話しができるのかな？と半信半疑だったのですが、このルールがあるからこそおもしろいのです。

私が参加したテーマは兵庫県から来られた方の「公に対する依存心・無関心をどうなくしていくか」で4名でスタート。まず各人がこのテーマで日頃思っていることを話しました。

- ・やればやるほど一部で固まってしまう。この温度差をどうしたらよいただろう。
- ・その思いを共感できるしかけが必要ではないか。例えば、無関心については興味の度合いによって関わり方を変える。また、依存心についてはその集まりや活動の説明の際、曖昧な表現を使わずに、困っていることなどを伝え、自分自身の問題として感じてもらえる工夫をしてはどうか。

など意見が出たところで、1人が抜けて、3人となり、さらに話をしていると、次第に

- ・確かに関わり方の幅を広くすると、参加しやす

いが、実際はそれを束ねる中心となる人も必要。また、こまめに情報発信していくことが大事だけど大変だ。

と少し煮詰まってしまったところへ、新たに一人が加わり再び4人に。その方が一言「特効薬はないですね」と言われ、そこから話が展開しだし、

- ・情報発信者が継続的に発信するモチベーション維持のためには、仲間が必要。
- ・「今伝わらなくてもいつか響くかもしれない」という話もある。
- ・相手を変えようと思うのではなく、今私に何ができるかと仲間ともに草の根でやっていくことが大事ではないか。

という結論となりました。私は話がおもしろく途中で抜けずに最後まで一つのテーマにいました。改めて振り返ると、目新しいことではなく、よく言われている結論となったのかもしれませんが、途中人が変わることで新たな視点が加わり、約40分ほどの間に濃縮された話ができたと驚きでした。また、ちょうど最近感じていたことを、他の人と共有できたこの過程が楽しかったのだとも思います。

例えば友人や知り合いだったら、普段からこのような話はしているのだと思うのですが、テーマも自由、人数も自由、時間も限られた中ではあるが、場の雰囲気によって変えていくという方法により多様な思いを持っている人から思いもよらないテーマが出て、初対面の人とここまで話を深められたこの自由な手法には目からうろこでした。

そもそもこの場をコーディネートされた方の場づくりがあつての体験で、今回はファシリテーションについて学びたいという人の集まりだったので、積極的な意見が出たり、早くまとまったという部分はあると思います。

私にとってどのような場面でこの方法を使ったら効果的かというのは今後の課題ですが、例えば大きなテーマだけ決めて、具体的なテーマは集まった人の中から出してもらい、人が移動しながら議論するというこのような話し合いの方法に挑戦したいと考えています。 (愛甲 美帆)

新人紹介

はじめまして。私は、5月に入社したばかりの新人です。入ったばかりのピチピチと言いたいところですが、若干、フレッシュさに欠ける、現在28歳です。というのもし少し前まで、私は一般廃棄物処理業をしており、毎日パッカー車(ごみ収集

車)の後ろを走り回り、時には運転し、ごみを収集して生活していました。少しゴミ収集の仕事を紹介しますと、仕事の時間帯は夜で、昼夜逆転の生活を強いられます。それだけでも、きついのですが、暗い中の作業、道路での危険な作業は想像以上につらいものです。入社して、3ヶ月以上仕事が続くのは、5人中1人位でしょうか。私は、それまで力仕事をしたことが無く、最初は本当に苦労しました。今は、そうして続ける事ができたことが大きな自信になっています。

初めての社会人生活の中で、目標とする人がいました。その人は、スムーズに仕事が終わるよう指示する立場の人です。指示を行うには、道の一本一本、アパート及び事業所名、エリアごとのごみの量を頭に入れた上で、各エリアごとの進捗状況を把握する必要があります。また、トラブルの際の対処も重要で、故障、事故、その他トラブルに対しても冷静に対処せねばなりません。しか

し、ただ知識があり、指示を出すのでは他の人はついてきません。運転技術と実績、そしてなにより、人柄が重要です。その姿を見て、私は仕事をする際は、いくつかの要素をそれぞれ確実に身につける事、そしてその上で、人に対して思いやりを持つ事が大切だということ学びました。

入社して、1ヶ月余り。仕事の技術、知識、経験、どれも持たず、スタート地点にも立てていない私ですが、一つ一つ自分の物にしていき、ゴミ収集業で培った、泥臭く一生懸命を武器に、誠意ある仕事をしていきたいと考えています。よろしくをお願いします。(吉田 佳祐)



表紙解説

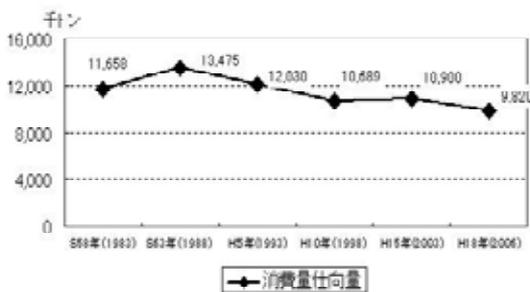
表紙のグラフの用語及びグラフについて補足説明をします。

自給率とは

これは農林水産省が「食料需給表」で毎年、算出しています。食料自給率とは、食料品目毎の生産量、消費量、輸出入量、在庫量の使用量をもとに算出します。(魚介類は重量ベース)なお、国内で消費される魚介類(海藻類除く)の量は、昭和63年頃をピークにして低下傾向にあり、魚離れが進んでいるようです。

$$\text{自給率} = \frac{\text{国内生産量}}{\text{国内消費仕向量}} \quad (\text{国内生産量} + \text{輸入量} - \text{輸出量} - \text{在庫の増加量} \text{ (又は} + \text{在庫の減少量)})$$

図 魚介類の消費仕向量の推移



資料:食料需給表

今後、輸入量の減少や重油の高騰により、魚介類の値段が上がると、さらに消費が落ち込むかも知れません。

何故、海藻類を除いて養殖率を算出したのか 養殖量の約4割は海苔やひじきなどの海藻類なので、一般的に魚介類の養殖といった場合には、海藻類は除外した魚介類そのものの養殖率を算出する必要があり、海藻類を除き、算出しています。

最近3年間では年1万人近くづつ減少している 漁業就業者

改めて漁業就業者(海面で年間30日以上作業するもの)のデータを調べてみると、漁業者の低下が著しいのに驚きます。平成19年時点で約20万人となっており、さらに60歳以上が4割近くを占めています。

これらのデータを眺めていると、安定した供給量と価格の魚介類を確保するためには、養殖業にますます期待が高まります。

表 漁業就業者 単位:千人

	S58	S63	H5	H10	H15	H19
男	15~39歳	112	88	55	39	32
	40~59歳	192	161	123	94	76
	60歳以上	64	76	91	97	91
計	447	393	326	276	238	204

資料:漁業動態統計年報

(山田 龍雄)



『ボローニャ紀行』

井上ひさし著

文藝春秋刊

「イタリアの街から世界の在りかたを考える」という紹介がされている『ボローニャ紀行 井上ひさし著』を書店で見つけ、なにげなく手に取り、パラパラとめくったときに目に入った言葉、「社会的協同組合」。この言葉に惹かれて本を購入した。

イタリアの中北部、半島の幹線軸に位置するこの地に、欧州最古の大学といわれるボローニャ大学が1088年に学生の組合によって設立されたという。ダンテやコペルニクスが学んだというこの大学が、学生の組合によって設立された？、ますます興味をそそられる。

長い歴史の中で、国と真っ向から戦ってきたボローニャは、いまや都市再生の世界的モデルとして評価されているが、歴史的市街地を残し、コンパクトシティを維持し、イタリアを代表する産業都市となり、経済的豊かさだけでなく、質の高い生活も実現できる街となった、その経緯、考え方が分かりやすく紹介されている。

著者の現地での様々な人々への取材を交えて、一貫して言っていることは、「過去と現在は一本の糸のようにつながっている」、「過去と現在が一つになったところから未来を拓いていく知恵を探っていこう」ということである。

その具体的な姿、成果として、ボローニャ方式と言われている「歴史的建造物を壊すことをせずに、中身を必要なものへ活用する」という方法であるが、これを可能にしているのは、コムーネ

(comune 地方自治体)や金融機関の支援を受けながら、市民の思いに基づき自主的に事業活動を行う「社会的協同組合」による運営手法である。困っている人がいれば、とりあえず手を差し出してあげるという精神、なにか必要があればすぐに組合会社、社会的協同組合をつくる、「思い」だけでなく「行動」を起こし運営していく事例が随

所に出てくる。

地域の資源活用による活性化は、今多くの地域で取り組まれている。そのモデルとして、このボローニャ方式がたくさん紹介されている。しかし、この方式が、日本の風土、文化を背景として実践されるには、多くの問題があるように思う。その代表的な例が、この地の歴史的な街並み、建物には、現在も人が住み、店舗が営業され、近代的なビルなどへ建て替えられてこなかった歴史、市民の歴史に対する思いがあるということである。今でこそ、日本でも古いモノを残そうとか、大事にすべきだということがいろいろな地域で言われているが、これを現在必要なモノへ活用することや、続けていくことに関しては、地域全体の意向を考慮するあまり、なかなかコトが進まず、地域社会全体でバックアップしようというところまでに到達していないと思う。

また、社会全体の歴史・文化に対する意識の違いを示しているのは、イタリアの場合、金融機関は、得られた利益の半分は地域に還元するための財団を持ち、競って支援をしているとのこと、当然ながら、金融機関以外にもそういう企業文化が根付いているという背景があり、企業は成長しても地域を見捨てたりはしていない。それでも世界的な企業はボローニャで生き続けている。

日本でも、世界的な商品・技術を持って頑張っている中小企業はたくさんあり、これを地域の人々が大事にしているところも多い。また地域が大事に守っていききたいという歴史的、文化的な資源もたくさんある。その「思い」を具体的に「行動」に移すこと、その方法を考える時には、参考となる本の一つである。(山辺 眞一)

よかネット No.91 2008.7

(編集・発行)

株式会社よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

<http://www.yokanet.com>

mail: info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

株式会社地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

東京事務所 TEL 042-501-2531

名古屋事務所 TEL 052-202-1411

株式会社地域計画・名古屋
